慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	本多利明の農政論 : その前提
Sub Title	On the agrar-policy of Toshiaki Honda
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.5 (1958. 5) ,p.373(1)- 384(12)
JaLC DOI	10.14991/001.19580501-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

山崎　功著『イタリア社会運動史』……飯田　鼎（七八）
関山直太郎著『近世日本の人口構造』……速水　融（八二）

本多利明の農政論

――その前提――

島崎隆夫

一

「我も固より臣なれば、人も亦臣なれば、同物又同体の論なれば論なし、論なければ止みがたく、日本に生を稟たる者、誰か国家の為を思ひ計らざらん、国家の為に悪きを悦び善きを憎んや、然れば善事は倶に扶け悦び、悪事は倶に避け憎むべきは、固より日本に生を稟たる身の持参也……」（経世秘策上）をもってはじまる「経世秘策」（寛政年間・一七八九―一八〇〇・の著作である）の著者本多（本田）利明（延享元年―文政四年・一七四四―一八二一、阿部真琴氏の研究によれば一七四三―一八二〇が利明の生存年代としてほぼ確実であるという(注一)）は、その生きた時代が鎖国により海外との交渉が思うにまかせず、国内的には多数の藩に分割され、身分的にも厳重に士農工商の階層区分が保たれた社会にして、統一的な「国家」乃至「民族」という意識が自覚的に形成されるに至らない時であったにもかかわらず、右に引用したごとく、おどろくべき啓蒙的な思想を懐いていた思想家であった(注二)。利明は誠に鋭い洞察力をもって、その時代の事物、国内社会経済事情、さらに当時の国際事情を看破し、その視野は極めて広く、合理的、科学的であり、その懐く思想の構想は進取的、発展的であり、その主張する政策は規模広大にしてしかも具体性を有し、時流をはるかに抜くものであった点において、近世社会経済思想史上極めて重要なる位置を占め、特異なる存在であった。それ故に、今日まで、多くの先覚諸氏の研究の対象となり、すでに利明の諸思想に関する研究成果が発表され、その著作の所在もほぼあきらかになり、伝記も又着々と明白にされることによって、その全貌がほとんど知られるに至ったのである(注三)。

この小論において、再び利明を俎上に取り上げ、論ずる所以のものは、先覚の研究にあらたなるものを敢て加えんとする野望より出るものではなく、筆者自身近世社会経済思想の展開を研究しつつある途上、利明の占める地位と、その特異なる思想に、多大の関心を寄せ、筆者なりに利明の思想を整理し、その農政論の一側面に焦点

をあわせ、利明の全思想体系解明の端緒をつかみたいことに外ならない。とくに、利明が彼の全思想体系を形成するその前提として、その時代の農業＝農民事情を客観的に把握し、その特殊な事情の発生する根源への鋭い洞察、さらに貧困―悪よりの救済を念願とする利明の諸政策への展開を中心として考えてみたい。この場合、利明が関東及び関東以北の諸地方と、関西及びそれ以南の諸地方との農業構造の差異に注目し、その構造的特質を科学的に解明せんとした意図に注意することは、幕末期における関東及び関東以北地方と総称される地帯の農業構造を明白にしうる一つの方法ともなりうるかと思い、利明の農政論、その土台としての現実の農業―農村の認識より経世済民論、海外発展論への展開という一連の思想構造を究明したいと考える。これらの研究は、わが国農政思想の展開、さらには社会経済思想の発展をあとづける場合に、一つの重要なる側面を示唆しているものとして意義深いものがあるかと思う。

（注一）　阿部真琴「本田利明の伝記的研究」（ヒストリア第一一号）

（注二）　三枝博音「日本哲学思想全書」（第四巻解題、一一一頁）

（注三）　本多利明に関する研究史の概略は左のごとくである。まず利明の資料については本庄栄治郎博士編「本多利明集」（近世社会経済学説大系）にほぼ集大成されており、阿部真琴氏の「本田利明著作目録」（ヒストリヤ誌上の「本田利明の伝記的研究」に付す）がまた参考となるであろう。

本多利明の研究は吉田東伍博士「徳川政教考」（明治二七年・一八九四）中の「西洋思想の経済談」において指摘されて開始され、明治末期、海老名一雄氏「本多利明の通商交易説」（明治四四年・一九一一、歴史地理一七の五）が発表、さらに大正四―五年（一九一五―一九一六）期に本庄栄治郎博士により利明の経済思想が全面的に研究されるとともに、利明の著書と資料が紹介された。福田徳三博士と本庄博士との利明の経済学説に関する論争はこの時期において注目すべきものであった。本庄栄治郎博士「本多利明の著書に就て」（大正四年、経済論叢第一巻第四号）、同「本多利明の経済説」（大正五年、経済論叢第二巻第一号乃至第六号）、同「再び本多利明の著書に就て」（大正五年、経済論叢第二巻第六号）、同「本多利明の経済説に関し福田博士の高教に答ふ」（大正五年、経済論叢第三巻第二号）、福田徳三博士「本多利明の経済説に関し本庄学士の教を乞ふ」（大正五年、経済論叢第三巻第一号）、内田銀蔵博士「本多利明の船舶論」（大正五年、海国公論第五巻第一号）、同「近世の日本」（大正八年）、本庄栄治郎博士「経済史研究」（大正九年）、伊藤武雄氏「本多利明の墓に就て」（大正一一年、歴史地理第四〇巻第三号）

「日本経済叢書」（大正三年―六年）及び昭和期に入り、「日本経済大典」（昭和四年）における滝本誠一博士の解題、さらに、本庄栄治郎博士「本多利明著『河道』について」（昭和六年、経済史研究第二二号）、同「西域物語に就いて」（昭和一〇年、経済史研究第一三巻第六号）、同「本多利明の経済段階説」（昭和一〇年、経済史研究）、本間嶽吉氏「本多利明について」（昭和一六年）、中村孝也博士「開国論者としての本多利明」（昭和一七年、歴史と趣味第一九編第二―三号）、田辺元生氏「本多利明の研究―その経済政策論を中心として―」（昭和一九年、経済史研究第三一巻第二及び第四号）、小島憲氏「徳川時代の経済論」（政経論叢第一九巻第五号）、佐藤直助氏「本多利明の人口論の背景」（昭和二九年、ソフィア第三巻第一号）、阿部真琴氏「本田利明の伝記的研究」（昭和三〇―三一年、ヒストリヤ第一一―一三号、一五号、一六号）、三枝博音博士編「日本哲学思想全書」第四巻（昭和三一年刊）の解題、等がその主なるものである。これらの中にあって、本庄栄治郎博士の資料の刊行及び全面的な研究、野村兼太郎博士の経済思想史的研究、及び最近の論文としては阿部真琴氏のヒストリヤ誌上に発表されつつある本多利明の伝記的研究及び本多利明著作目録の整理・解題はとくに注目すべきものである。

二

本多利明の伝記――思想形成の過程――に関しては、今日必ずしもその全貌が明白にされているわけではないが、前述せるごとく本庄博士の研究、伊藤武雄・森銑三氏等の伝記的研究のあとをうけ、最近の阿部真琴氏が試みられた「本多利明の伝記的研究」によって一層明白となった。この小論では、利明の生涯についての詳細なる論述を省略するが、阿部氏の右の論文によると、利明は一七四三

（寛保三年）に生まれ、一八三〇（文政三年）一二月二日、七八才にて歿している。出生地、出生家については、旧来の村上城下士の生まれであるというよりも、越後蒲原郡農村の出とみ、その家はれっきとした大名の家臣でなかったことを推定している。[注二]利明の思想形成の上に、重大なる意味を持っていた生育地周辺の社会的・経済的環境については、越後蒲原郡の一帯が、新潟其の他の港の背後地であり、水田＝稲作が発展し、やがて小商品生産が展開し、あたらしい諸条件が熟成しつつあった地方とみることができよう。すなわち、「利明の郷里はともかく雪ぶかい北越後ではあったが、江戸中期以後広く新田が開発され、豊かな米作地としてあらわれた。なかでも紫雲寺潟、福島潟、鎧潟の開拓は大きく、新潟県特有の大新田地主がそこに発生した。農民の養蚕・加工手織業から機業地としてもあらわれた。そのほか北越後は紙・茶・黒ろう・うるし・漆器製品・鮭などの水産・石油・石膏・銀・銅などの鉱産をもち、各種商品の積出港としての新潟のほかに瀬波・岩船などが繁栄した。大阪との取引はもとより、奥羽・北陸・松前との交通が発展していた。この経済的発展はもとより小農民生産の前進にもとづくがそれと同時に問屋商人・地主の収奪勢力を成長させた」[注二]ことが、この時代におけるこの地方の傾向であったとみることができよう。この様な生活環境の下に生育し、その家系が必ずしも上士でなかった利明は、青少年期より因襲的な、伝統的な習字・素読をきらい、算学を好み、四書五経的・封建支配者的道学をこえて実用的・合理的学問の方向に向い多大の関心を寄せたと思われる。この方向は利明が十八才の時江戸に「夙に済世の志を懐き、実用の学を修ん」[注三]として上って行った時以来急速に進展し、一層確定した。江戸に出た利明は算聖といわれた関孝和（一七〇八）が完成した関流の和算を、建部賢弘の門流、幸田親盈門下の今井兼庭に学んだ。利明は厳格なる封建的・ギルド的規制下にあった関流の秘伝の全段階を習得したのち、この秘伝制度に批判的であった人々と共に、利明は次第に関流算学をのりこえ、ヨーロッパ数学に目をむけるに至った。算学のほかに、天文・暦学を千葉蔵胤に学んだ。当時の天文・暦学は旧来の明代梅文鼎系統の流れをくみ、その伝統にしばられていたが、この頃より漸次伝統よりの脱却が行われ、ヨーロッパ天文・暦学への転換への時代に入りつつあった。利明は、天文・暦学を学ぶことによって、ヨーロッパ学への接近を示して来た。又、剣術の師としての山県大弐との接触も、大弐が当時すぐれた算学・天文・兵学の習得者であり、尊王思想の持主であったところより、利明の思想形成の上に役立つものがあったと思われる。これら諸学の研究を通じ、ヨーロッパ学への接近によって、利明の学問態度は極めて合理的・数的・客観的・科学的方向が強められ、利明の全思想構造をいちじるしく特徴づけるものとなった。これらの傾向は、もちろん一つにはこの時代の風潮の中にはぐくまれつつあったものであるが、利明の修学時代の思想形成の在り方と深く結びつき、これが利明の経済論展開の仕方が、極めて数的であり、合理的であったことにあらわれて来る。

二四才になった利明は、江戸牛込喜羽に私塾を開き、天文・地理・測量・算学などを子弟に教育した。人々は利明を「喜羽先生」と尊称していたが、やがて、私塾を門人坂部広胖に託し、自ら「経世家」を以て任じ、各地を遊歴し、各地の地理・民情・物産・交通などを詳細に視察調査するに至った。この時期の利明の経験と鋭い観察は彼の経済思想確立の基礎となる重要なものとなった。利明はこの時期以降積極的にオランダ語を学び、オランダの科学・技術に精通し、ヨーロッパ近世科学への接触を深めて行ったこととあいまって、利明をしてまことにすぐれた「経世家」としての活躍を可能としたのであった。すなわち、利明はついに「交易の道を開き民俗を改善するの必要なるを感じ啻に之を内地諸藩の間に試むるのみならず広く国際間にも之れを実現し以て我が国富の増進を計らざる可らざることを知り之れが為めには先づ航海術に通ずるの要あり」[注四]として、航海術などの産業技術を習得することによって、自己の経済論に一層の具体性を附与することができたのである。

三

利明はその思想形成の過程において、すでにみたごとく、四書五経的・封建道学的な学問を以て自らの思想を固定し、それらの引用を以ていたずらに自説を修飾し、旧来の範囲より一歩も越えざる保守的な主張を行うことにあきたらずして、算学・天文・暦学・地理・測量及び各種の産業技術（例えば航海術・冶金術など）を学び、とくに数学と航海術のごとき西欧の近代的・科学的精神に影響をうけ、自らの思想を鍛錬し、その結果利明の学問的態度は極めて合理的にして、豊かな科学的精神に貫かれるに至ったことにまず注目する必要があろう。このことによって、封建社会の内的矛盾がようやく明白に露呈しはじめた時代において、はやくも、封建主義から由来する狭隘なる精神と、排他的な思想を克服し、東洋的―日本的な学問と技術との限界を認識し、批判しつつ、西欧的―近代的な科学と産業技術の方向に急速に接近し、時代が直面しつつあった現実の諸問題に対し、その時代にあってはまことに特異なる理論と施策とを発表することを可能としたのである。

利明の学問態度を、利明の述べているところに従って整理してみると、利明は「西域物語」（寛政一〇年・一七九八）の始めにおいて、わが邦人が西欧人に対し全く間違った認識をもっている事実を指摘し、その原因が、事物の本性をたしかめる努力をせず、「国初以来支那の書籍の外に書籍なし」[注二]とただ思いこみ、支那以外の国々を

（注一）　阿部真琴氏「本田利明の伝記的研究(一)」ヒストリア第一一号、六七頁以下。
（注二）　阿部氏「同」六八頁。
（注三）　本庄栄治郎博士「近世の経済思想」一三五頁。
（注四）　本庄博士「同」一三五頁。

すべて夷国とみた。これは全く事実に反することはなはだしく、すなわち「学問の道にあるまじき流儀杯」[注二]を張って、書籍を多く読まず、「衆人を視下し高慢胸外へ洩れ、衆人に忌嫌るなり、浅はかなる次第ならずや」[注三]というところにあるといっている。当時は真の学問的態度と離れる風潮がただよっていた。利明は学問の道を如何に考えていたか、「思ふに学問の道は左にはあるまじ、学問の本旨とする所は、衆人に背ず頑愚をも能容れ、国家に益ある道を勉め守るの外にあるまじく、其最初は何より学で其道に入らんとならば、窮理学より入らんも近かるべし、窮理学とは何をいふぞなれば、彼天地の学をいへり、これに暗くては何一つ分るはなし、其天地の学は何を以て入らんとならば、其最初は数理、推歩、測量の法より入らんも近かるべし、是等を能透脱の後、西域の学に入べし」[注四]という。学問の本旨とするところが如何に旧来の封建道学と異なっていることか。さらに、学問への道がまず「窮理学」を学ぶにはじまり、それへの道は数理、推歩、測量の法にあることを主張する利明にとって、学問の道は単なる政道であったり、倫理・道徳の道ではなく、それらより離れた、それらを克服した「科学」であることが鋭く看破されていたのである。勿論、利明をしてかくのごとき学問態度に至らしめたものは、時代の風潮ともなりつつあった蘭学を通しての西欧思想の影響であって、利明においてそれが鋭い形で現われていることを知りうる。とくに「数理」についての利明の確信は非常なものであった。数理は経世済民のための政策を樹立するため必要欠くべからざる所以であることを認識した利明は、「人道に預る器は度量衡秒の四器ありて、事を決断すること明白なり。是此工夫鍛錬の道具なれば、算数を以て総根とし、此道具を用て是を御し、人道正整するなるべし」[注五]という。度量衡秒の四つを利用し、事物を正確に把握することが、すべての政策の根底に存在するものである。それ故に、利明は先覚熊沢蕃山及び荻生徂徠を批判する視角は、両先覚が「数理」にくらいことの側面への批判であった。「治平以後二百年計りの内に色々の人物出て、種々の能抜に志を立て、才力の限を竭し、様々の達識も多く出たる中に、経済に長じたりとて世の賞を得たるは、熊沢、荻生の二子の外なし、然るに二子が説所は、此方の費を省き彼方を扶け、又彼方の費を省き此方を扶れば、万端に便利を得る故に終に国家に豊饒を剔るといへり、同じ土地より出産する産物を用て遣取し、利益ある事をのみ色々様々と情張て、世話する仕方の善悪を討論するまでなり、なる程其如くせば随分宜く、悪くはあるまじく、然れども元来際限ある土地より出産する産物を用て、際限なく増殖する市民の衣食住の用に達し、猶有余あらしめんとするの計策の外なし、是無理なり、際限ある土地より出産する産物は、出産に際限あり、年々に出生する国民は、年々に増殖して際限なし、終に国民は国産より多く、国産は国民より少くなるべし、末遂てなしがたき仕業なるべし、然るを情張て固辞附むとて無理なる事をのみいふは傲なり、二子が英才古今挙なれども、惜き事には算数に暗昧なる故に、其至り極る所に到れば、天文学、地理学に縁て海洋渉渡の明法を組挙、国民へ垂訓すれば、海国に具足すべき制度なる故に、追々末増に豊饒の末を遂る道理あるも、穿鑿なく妄に勘破せしは、二子が智見の疵謬なり」[注六]という（傍点は引用者）。

まことに堂々たる自信と抱負であり、両先覚に対し学問の在り方において一歩前進したものあることを知りうるのである。かくのごときは、数理により客観的に現実を計測し、計画を樹立する方法であって、そこにはまことに近代的思惟の端緒ともいうべきものをくみとることができよう。かかる思惟方法は国務を遂行する場合、「総て国務に預ることは時勢人情より取入ざれば、何一つ出来ざる者なれば、古今にも亘ず、金言妙句にも拘らず、唯今の時勢より執入て[注七]他に背くことなく、天下国家に益ある仕方に勉るを名て国務といふ」主張を生み、利明をして時勢人情、唯今の時勢をよくつかみ、それにそむかぬことを政策の根本におかしめた。さらに、国務の遂行に本末があり、前後があり、首尾一貫して計画を樹立することが、国務を完遂するための欠くことのできぬものであることを主張している。すなわち、「当時の国務に前務あり、後務あり、本首あり、末尾あり、此前後本末の首尾貫通して、而後興業に企ざれば決して成就せず、其前後本末の首尾貫通は、何に縁てか明白にせんとならば、則算数の道なり。算数を以て台となし、天文、地理、渡海の道に透脱し、何一闕目なき様にせざれば、物毎に差支ることのみ多くして、何事も未遂て相続することなりがたし、斯ののっぴきならぬ道理も弁なく、無分別にして僅の一端を得て、大業に掛る杯とは悃果たること[注八]なり」と、かくて、「前後本末を厚深く遠慮すべし、尾首貫通するの後興業を企て順とせり」[注九]という。ここにはじめて正しい施策が樹立する根底ができるのである。まことにおどろくべき思惟方法であった。

（注一）　本多利明「西域物語」（本多利明集一二三頁）（以下本多利明の著書を引用する場合は、本庄栄治郎博士編「本多利明集」近世社会経済学説大系、昭和一〇年三月の頁数を示すこととする。）

（注二）「西域物語」（本多利明集一二三頁）

（注三）「同」　（同　一二四頁）

（注四）「同」　（同　一二四頁）

（注五）　本多利明「経世秘策後篇」（本多利明集五六頁）

（注六）　本多利明「経済放言・経済総論」（本多利明集一一三―一一四頁）

（注七）　本多利明「経世秘策後篇」（本多利明集五六頁）

（注八）「同」（同　五一頁）

（注九）「同」（同　五六頁）

四

利明の思想が時流を抜くものであったとはいえ、矢張り時代の影響から生じたものである。[注一]利明が活躍した延享元年より文政四年の

時代はいわゆる「田沼時代」より松平定信の「寛政の治」を経て「文化・文政の大御所時代」に至る時期であって、心ある識者にとっては、まことに容易ならぬ時代として目に映じはじめていた。まず国内的にみると、すでに封建社会の矛盾が進展し、そこには近代的なものの誕生の苦悩が生まれはじめていた。すなわち、田沼時代とよばれる一時期にみられた政治や風儀のいちじるしい頽廃、天変地異の続発、人心の不安動揺のあとをうけて老中職についた松平定信は、政治及び風紀を粛正し、倹約を旨とし、吉宗の享保の治を範として寛政の改革に着手したのであったが、すでに時弊は深いところに存し、十分なる改革が成功せぬうちに、文化・文政の時代につづき、太平を鼓腹謳歌し、文化爛熟の時代に入ったが、その中にはすでに救い得ぬ不健全なる頽廃的色彩を帯び、封建末期の世情を呈しはじめ、すでに新しい時代、社会の機運があらゆる面に見えはじめていた。思想史的にみれば、儒学内部において批判的見解の展開がみられ、あらたに国学が勃興し、さらに西欧との交流の中に蘭学の興起がうながされて、新しい時代の思想的土壌が準備されつつあった。これに加えて、幕藩政治体制の批判にまで次第に高まって行った尊王論が萌え出していた。科学、産業技術の面においても、和算をはじめとし、本草学や農学の発展、さらに西欧流の医術、諸藩の産業技術の展開がみられつつあった。しかしながら、他方、武士及び百姓の困窮と商人の富の蓄積とが、多くの識者の問題となっていた。とくに農村の現実をみると、あらゆる矛盾のしわよせを一身に受けて、まことに悲惨なものであった。直接的には幕府及び諸藩の財政的窮乏が農民よりの高率租税の徴収にむけられ、それに加えて、天明以後の飢饉、洪水、などの災禍が続発し、農村の荒廃はその極に達し、餓死する農民の数はおびただしく、美田畑は放棄されて荒地となり、「間引子」の悪習が蔓延し、遊女浮浪民が輩出し、絶望した農民は一揆や打毀しに向ったのであって、かかる傾向はますます激化し、封建社会の根底を動揺せしむるものであった。かくのごとき事情は、農村内部における小商品生産の展開、機業其の他の副業の成立、それを通じての問屋資本、商人資本の集積と活躍、寄生地主の発生と展開と相関聯せしめられて理解さるべきものであり、これらは旧来の封建的農業構造を大きく変貌せしめつつあったし、より新しい機構の下で展開せんとする工業生産の動向は、未だ多くの阻害条件の下で狭隘なる道に押しこめられていた。

右の国内事情と共に、日本をつつむ国際関係が急激に重要性を増加して来た。いまこの小論で詳細に論ずることができず、直接利明の思想との関聯あるもののみに限ってみても、ロシヤの東漸により日露両国の接触とともに、北方問題が関心の的となって来た。明和・安永の頃より蝦夷地が注目され、蝦夷開発経営が論ぜられて来た。すなわち、一七七八年（安永七年）ロシヤの商人が国後島に上陸し、松前藩に通商を求む。一七九二年（寛政四年）露国使節ラクスマン（Laxman）が漂民伊勢の舟子幸太夫等を護送し、北海道の根室に入港、通商を求む。工藤兵助「赤蝦夷風説考」（天明元年乃至二年著）が開国を論ず。又、明和・安永の頃（一七六四―一七八〇）からロシヤ人が千島の南部に移住しわが住民との摩擦を生ず。幕府は蝦夷視察を実施す。一七六七年（明和四年）及び一七八五年（天明五年）に幕吏を派遣す。天明五年には利明も一行と共に蝦夷に行くことが許可されたが病気のため門弟の最上徳内を送る。一七九二年（寛政四年）林子平「三国通覧図説」「海国兵談」により禁錮、等、北方関係は急速に激化して来た。他の諸外国の事情も、和蘭を通じ次第に明白になると共に、これらの国際関係は日本にとって非常なる恐怖を懐かせるものがあったのである。

（注一）　野村兼太郎「本多利明の経済開発論」（三田学会雑誌第三三巻第三号一八頁）

五

利明が経世家として直面した時代はまことに容易ならぬものであって、彼はその時代が悩みつつあった内外の諸問題に対し、鋭い合理的・科学的な目を以て、その本質は何であり、その原因が何処に存するかを洞察しようと努力し、その把握の上に、利明は独自の施策を樹立し、それによる済世救民を願ったのであった。彼の経済論、とくに農政論をみる場合に、その根底にあった利明の現実把握にまず注目し、その内容をみる必要があろう。

本多利明の農政論

利明の目にまず明白な形をとって映じたのは、幕府及び諸侯＝武士階級が徳川中期以降いちじるしく貧窮化された事実である。この貧窮の原因が何処にあるかというと、利明はまず国内において商人階級の発達がはげしく、「天下の通用金銀はみな商賈の手に渡り、豪富の名は商賈にのみありて、永禄の長者たる武家は皆貧窮なり、故に商賈の勢ひ追々盛にして四民の上に出たり」[注二]、この結果「当時は日本の国産を凡十六に割て、其十五は商賈の収納とし、其一は武家の収納とする故武家貧窮」[注三]したことを指摘している。この財政困難なため、「家臣の宛行を借揚げ、商賈の借財を償といへども、滅ぜずして却て増殖すること常なり」[注四]という有様であった。利明はその一例として、六万石の大名が借財が増加し、返済せざるため公訴となり、借金総額金百十八万両余を返すために六万石物成をもっておよそ五六十年もかけねば皆済できぬ有様であることをのべ、「皆々ケ様の身上のみにあるまじけれども、何れ商賈の借財のなきはなし、苦々敷にあらずや、其有様を商賈の眼には、猟師の網に掛りたる魚鳥の如く見るべし」[注五]という結果となると。この傾向を助長したのは武士階級の側における無智、政治家としての資格の欠除である。「時の執政の御方々は皆大身の内より出給ひは、農民稼穡の道に疎く、又属官阿諛すれとも補佐する事なく、故に適々令したまふ事は農民の欲る処に齟齬」[注六]せしむるがごとき支配者の無力である。

かくて、武士階級の貧窮化は当然農民階級への虐政となって現われてくる。「諸侯互に有司を撰び、農民を責め虐げ、借財を償ふといへども減少せず、却て追年増殖する故、有司の不器量なり迚退け

られ、跡の有司又も農民を責め虐げ、借財を償ふといへども減少せずして又も殖へゆく故、如何なる豪傑も惘れ果、剤を投て隠居するものあり、或は病気と偽り引籠居て無分別して天死するもあり、国君有司智慧の限りを尽すといへども、中々減り行足も見へざれば、俗に所謂借財の淵に沈み果、子々孫々更に浮む瀬なし、後には商賈の意に任せ、所領を渡して仕送を請け、公私の用を達すれば、冥加を思ひ天職を守り、農民を撫育する杯は思ひもよらず(注六)」という有様で、「天明癸卯以来餓死百姓の田畑亡処となりたること夥(注七)」しく、「……差当て食糧の乏敷と、衣類の乏敷と、家居破れて風雨すれば、外のごとく亦処にも困る様なる身上にては、間引子するは至極尤もの事なり、是撫育の制度もなく、教示介抱もせずして過租税課税のみに日々を虐げられ、仏氏がいふ地獄の栖(注八)の如し」であった。

一般的にみれば、当時の武士―農民階級の貧困は右のごとく把握されているが、利明はさらに地方別、ことに関東及び関東以北の地帯と、上方、中国、西国の関西地帯とを大別し、そこにあらわれている社会経済的現況の相違と、そのよって来る根因とを明白にせんとしている。かかる洞察は、利明の地理学的把握とも察接なる関聯があるものと考えられるが、両者の相違を単に自然的諸条件にのみにきすることなく、そのおかれている社会・経済構造、とくに農民収奪の機構と、商業―交通の発達の在り方という社会・経済的側面に焦点をあわせて論じていることは注目に値すると思われる。いま、利明により把握された関西、関東両地方のいちじるしい事情の相違とその根因とをみることにしよう。

まず関西地方の事情であるが、「関西の諸国は何れも富国にして大豪富の商賈軒を並へて夥(注九)し」く、内々に間引子を行う農家も存在するが関東諸国ほどはげしくない。その因は何処より来るかというと、第一は「租税は定免とて年貢に定数あるゆへ、耕耘苗肥に力の限りを尽し、豊作するを人々手柄と心得たる風俗(注一〇)」があるからである。すなわち「古法の儘にて定免取箇の定法(注一一)」が行われている故に、比較的農民搾取の度合薄く、農民に余剰を残すことが可能であるという。さらに、此の地方においては、農業生産に米麦二毛作が一般的に導入されていることが指摘されている。利明が「西域物語」「河道」「蝦夷道知辺」等の諸処であげている一例をみると(注一二)、田地一反歩に表作として稲をつくり米四石余の収穫、裏作として麦五石余の収穫、一カ年両作して穀物およそ十石余の収納がある場合をあげ、年貢定免であるから高租税としても六七斗より八九斗、それに村入用諸掛物とを合せておよそ米一石計であって、これを上納皆済した残穀八九石は全く百姓の収納となるという。かくのごとき有様であるから、百姓は相続することができる。ただ土地に限りがあり、年々百姓数が増殖して行くために、内々密に間引子の悪習が行われるにすぎないのである。もちろん右の数字には多分の疑問無しとしないが、百姓がその生産力の高きことと、租税制度とによって相続が安き筈である。さらに、第二に関西が盛なる所以は「剰へ船舶の海道宜く国産の運送仕安きに依て富国と成へき道理(注一三)」なりという。海川よく開け、東国北国西国の国産を積たる船舶はことごとく摂州兵庫の津及び大坂港へと群集し、毎日日和さえよければ出入する船舶二十余艘にも及び、日本の国産皆此両所に群集し、売買が行われ、土地が殊に繁昌するに至ったのである。しかもそこには有力なる商人が発生し、他地方に荷を送り、おびただしい利益をあげるに至っている。

これに反して、関東及び関東以北の地方は利明により如何に把握されたか。「関東は将軍家所在の土地なれは豊饒繁栄なるへき筈也、然るに御府内を五里も不離して大造に亡所(注一四)あり」、「関東の諸国は何れも貧困にして大豪富の商賈は絶て有事なし、日本の大都会所在の土地なれば、関東の諸国こそ左有へき筈成にいつれも貧困なるは是眼の附け所(注一五)也」、「夫婦相談合体して出産の節綱に敷潰し、何かそしらぬ体にするを間引子といふ。関東より奥羽に至る十ケ国に最多しと(注一六)せり」等と述べているところよりみると、江戸は大坂に比して巨富を擁する商賈少なく、諸国は貧しく、農村には亡処があり、餓死人を出し、間引子の悪習が公然と行われている。悲惨なる農村の事情である。そこにはおびただしい農村人口の減少がうれえられている。「関東より奥羽迄、爰は昔の何村、かしこは昔の何郡の内なりなど、是を無村無地高と云、就中奥州計りにも亡処高凡五郡に盈たり、癸卯以後三ケ年凶歳飢饉にて、奥州一ケ国の餓死人数凡二百万人余、固より不足なる農民なるに、如此の大造なる餓死人ゆへ、夥しき亡処出来せり、それに矢張り今に間引子の悪俗止まざれば農民減少し、終に断絶の勢ひあり(注一七)」という有様であった。かかる事情は如何

なるところより発生して来たものであるか。利明の述べるところをみよう。「此疵謬何れの所より湧出ると云に、色取検見の定法及ひ渡海の海道に係る(注一八)也」と結論しているごとく、第一は色取検見の定法による収奪、第二は海川の交通困難による商業発達の不十分、この二点を指摘している。第一については、「関東の諸国は、色取検見の定法なれハ、豊凶作の差別なく検見の定法に縁て五公五民の取箇(注一九)なり」、「其虐制といへば、検見春法の制度あれば、耕耘よくして豊作するといへども、検見の節猶長たる役人来て悪検見をするゆへ、田地に出来の限は皆取詰るなり(注二〇)。」という検見春法制度の存在を、農村貧困化の根本原因とみている。「豊作すれば豊作に相応し多くとられん意の曲あり、苗不足し耕耘疎妄なり。是を名て荒し作りと云(注二一)」あるいは「必竟耕耘能、苗十分にして豊作するは大損なり。其年毎に苗代程余慶に損あり。夫より出来次第に荒し作の方便利多しといへり(注二二)」という告白となるのであって、働きに働き、豊作になればなったで、余剰を残さず収納せしめられるのである。いまその一例として、関西の場合と同様に、「西域物語」「河道」「蝦夷道知辺」等の諸処に記されているものをあげると(注二三)、二毛作のできぬ「片作場」であり、田地一反歩にて米二石を収穫する（生産力の低さ）のみであって、これより、一石は年貢（五公五民）となり、残りの一石より種々の高掛物及び村入用を出し、さらに伝馬夫役を勤めるために、残米は僅少であって、常に不足し、その不足は農外の稼穡により償うよう努力するが、ついにかなわずして、良田畑と知りつ

つそれを廃田とし、亡処とするのである。かくて、関東の諸国は年と共に亡処が増加して行く。これは農民が過税及び高掛物村入用伝馬夫役等を逃れ、それをはぶかんとするために止むをえずして取られた手段であるが、「其実は至極最取の事にて不便と云も余り有」（注二四）というものである。このように「上方中国と表裏」して、田地を多く所持している百姓ほど貧窮して行く原因は、「色取見取の定法」にあるため、「田地少く所持せん事を謀る風俗なれば、極貧に困窮し、間引子すると荒し作りは箱根より東諸国の国為なり」（注二五）という結果となったのである。第二については、「剰に船舶の海道及河道悪敷、国産の運送容易に仕難きに縁て貧国と可成道理明白也」（注二六）と、関東諸国が衰微する根本の原因は、実に「東都へ渡海の海道に両所の大難所有故」（注二七）である。これが利明をして長器論を書かしめた国内的事情でもあって、よく有無相通ずるための、運輸路及び運輸機関の改良発展に意を向けるに至った所以である。第三のものとして考えられることは、関東地方における利根川の存在である。「関東の国病は利根川に有、此川の水害は霞ケ浦及鹿嶋入江の大湖に洪水溢て水害と成也」（注二八）という。利根川が関東平野に交通の利便を与えるものであると共に、一度洪水至れば、関東の沃野は泥水と化してしまうのである。ここにも関東における貧困の一因を見出している。（未　完）

（注一）　本多利明「経世秘策・巻下」（本多利明集二八頁）

（注二）　本多利明「長器論」（本多利明集二一七―八頁）

（注三）　本多利明「経世秘策・巻下」（本多利明集二一頁）

（注四）　「同」（同　二一頁）

（注五）　本多利明「自然治道之弁」（本多利明集二五二頁）

（注六）　本多利明「経世秘策」（本多利明集二一―二頁）

（注七）　「同」（同　二二頁）

（注八）　本多利明「西域物語」（本多利明集一八九頁）

（注九）　本多利明「河道」（本多利明集二二五頁）

（注一〇）　本多利明「西域物語」（本多利明集一八九頁）

（注一一）　本多利明「河道」（本多利明集二二五頁）

（注一二）　本多利明「西域物語」（本多利明集一八九頁）

（注一三）　本多利明「河道」（本多利明集二二六頁）

（注一四）　「同」（同　二二五頁）

（注一五）　「同」（同　二二五頁）

（注一六）　本多利明「西域物語」（本多利明集一八三頁）

（注一七）　本多利明「経世秘策」（本多利明集二二頁）

（注一八）　本多利明「河道」（本多利明集二二六頁）

（注一九）　「同」（同　二二六頁）

（注二〇）　本多利明「西域物語」（本多利明集一八九頁）

（注二一）　本多利明「蝦夷道知辺」（本多利明集三三二頁）

（注二二）　本多利明「西域物語」（本多利明集一八九頁）

（注二三）　本多利明「河道」（本多利明集二二六頁）

（注二四）　「同」（同　二二六頁）

（注二五）　本多利明「蝦夷道知辺」（本多利明集三三二頁）

（注二六）　本多利明「河道」（本多利明集二二六頁）

（注二七）　「同」（同　二二七頁）

（注二八）　「同」（同　二三七頁）

アメリカ産業革命の歴史的特質

――商業資本転化の歴史的意義をめぐって――

中村勝己

目次

一、序論
二、フォール・リヴァー
三、チコピー
四、ホリヨーク
五、結語

一

戦後に於ける我が国のアメリカ経済史研究は著しい進歩を遂げた。その研究の中心はいくつかあったが、特に研究が集中されたのは産業資本の形成過程であった。その論点は、一言にしていえば、アメリカ産業資本の形成は、ボストン等の大商業資本が「ボストン製造会社」を始めとする「ウォルサム型」綿業にその資本を再投資したコースに求むべきか、ニュー・イングランド農村の分解の中から出てきた農村工業の自生的展開に求むべきか、という点にあった。[1] かの地の研究は素より、我が国に於ける諸研究も、ニュアンスは様々であるが、大体に於て前者を支持している様に思われる。併しその方法なり論点なりは様々であり、筆者には承服できぬものもないわけではない。

ここで問題点を筆者なりに整理してみるとこういう事になる。第一に、どの産業部門をとりあげるか。当然乍ら基幹産業をとりあげるべきであり、毛織物業・特に綿業と鉄工業がそれである事は略〻異論のない所であろう。[2] 第二に、商業資本の再投資された部門は綿業に限られず、主として投機的部門、例えば土地投機、橋梁・道路及び運河建設、保険・銀行業及び製造業等であって、綿業への投資はこの時期の再投資の中でどの程度のウェイトをもちえたのか。[3] 第三に、この商業資本の再投資の仕方は、直接事業に介入するというよりはむしろ「共同出資者・投機業者・地主・貸金業者・投資家」[4]としてであったのではないか。第四に、商業資本の刺戟の下に行われる産業資本の展開をどの様に評価し位置づけるか。即ち商業資本